

戦争をテーマにした本はたくさんあります。みなさんに読んでほしい本をリストにしました。
 黄色の本はブックトークで紹介した本です。その他の本は紹介文を読んで、気になる本を読んでみてください。
 できるだけ複数の本を読んで、戦争の悲惨さ（ひさんさ）、平和の尊さ（とうとさ）について考えましょう。

戦争と平和を考える読み物

2017年 竹矢小学校図書館

名前（ ）

	件名	書名	作者	出版社	紹介	出版年
1	広島原爆 210	絵で読む広島原爆	那須正幹 西村繁男	福音館書店	二人の作者が長年広島で取材を行い、原爆が落ちる前の広島、落ちてからの広島、原爆の恐ろしさを伝える、調べ学習にも使える内容。	1995年
2	広島原爆 319	さがしています	アーサー・ビナード	童心社	広島原爆で被害にあった物はたくさん残っている。持ち主を探して語りかけてくる。アメリカ人のアーサー・ビナードさんが作ったことで話題の本。	2012年
3	広島原爆 913	よっちゃんのビー玉	児玉辰春	新日本出版社	実男は、年の離れた弟のよっちゃんをとともかわいがっていた。8月6日、よっちゃんにはビー玉をもったまま、被爆。よっちゃんはさいごまで、ビー玉のことを言って、死んでしまう。原爆資料館にある、解けたガラス瓶にまつわる実話をもとにかかれた物語。	1990年
4	広島原爆 913	まっ黒なおべんとう	児玉辰春	新日本出版社	折免滋君はお母さんがつくってくれたお弁当を持って、元気よく出かけて行った。しかし、彼がもどってくることはなかった。骨になった滋を確かめるすべは、彼が持っていたまっ黒なお弁当だった。	1989年
5	広島原爆 913	いわたくんちのおばあちゃん	天野夏美	主婦の友社	いわたくんちのおばあちゃんは、1945年8月、原爆の落ちる数日前に家族写真を撮った。しかし、その写真を見ることができたのは、おばあちゃんだけだった。家族は皆、原爆のために死んでしまったから…。おばあちゃんは、カメラを向けられると、「いやーよ」と言うのは、なぜ？	2006年
6	広島原爆 916	禎子の千羽鶴	佐々木雅弘	学研	原爆の像のモデルとなった、佐々木禎子さんが歩んだ短い一生を、お兄さんが心をこめて書いた。	2013年
7	広島原爆 913	飛べ！千羽づる	手島悠介	講談社	原爆の子の像のモデルとなった禎子(さだこ)さん。被爆後9年がすぎ、平和な日々を送っていた禎子さんに、白血病という病気がおそいかかった。生きたいという強い気持ちから千羽づるを折り続けた禎子さんの闘病の記録。なぜ、原爆の子の像のモデルとなったのか。	2000年
8	広島原爆 E	おりづるの旅 さだこの祈りをのせて	うみのしほ	PHP研究所	原爆が落とされて10年後、さだこさんは亡くなった。さだこの同級生たちが、「原爆で亡くなった子ども達の慰霊碑をつくろう」と声を上げ、全国から寄付金が集まった。広島には原爆の子の像がたち、1995年アメリカにも「こども平和像が完成した。	2003年
9	広島原爆 913	おこりじぞう	山口勇子	新日本出版社	広島町のあった笑い地蔵は原爆で吹き飛ばされ、目の前で苦しむ子どもたちを見て、おこり、ついに頭がぐたけてしまう。その後、頭に丸い石をのせられたが、それもおこり顔になった。原爆へのいかりを描く。	1982年
10	広島原爆 916	つるにのって「とも子の冒険」	ミホ・ソボ	金の星社	とも子はひとりで、広島平和記念公園にやってきた。とも子が公園の中を歩き、「原爆の子の像」の前にやってくると、不思議なことに、思わぬ冒険に出かけることになる。	1967年

11	広島原爆 E	わたしのヒロシマ	森本順子	金の星社	作者の森本さんは13歳の時に被爆する。自分の体験を絵本にし、平和をうたっている。	1988年
12	広島原爆 916	いしぶみ 広島二中1年生全滅の記憶	寺田志桜里	ほるぷ社	戦時中、育ち盛りの中学生が、食べ物もほとんどない、夏休みもない、勉強も落ちていてできない、そんな状況の中、わずかな希望をもち暮らしていた。しかし、原爆が全てを奪ってしまった。中学1年生の少年達の最期の記録。	1985年
13	広島原爆 E	まちゃんと	松谷みよ子	偕成社	もうじき3歳になる女の子が、原爆の被害に合う。女の子は苦しみながらねかされ、トマトを口に入れてやると、「まちゃんと」(もうちっと)といいながら、死んでいった。	1985年
14	広島原爆 913	うそつき咲っぺ	長崎源之助	佼成出版社	40年ぶりに戻った広島で、道子は被爆体験を語る同級生の咲子をみかける。しかし、咲子は被爆していないはず…。なぜ、咲子は被爆体験を生々しく語っているのか。家族が死に、自分だけ生き残った咲子の苦しみとは。	1995年
15	広島原爆 913	ピカドン だれも知らなかった子どもたちの原爆体験記		講談社	4, 5歳の時に被爆した子どもたちが5, 6年生になったときに体験記としてまとめた。小さい時の記憶が鮮明によみがえっていく。	2003年
16	広島原爆 916	ぼくは満員電車で原爆を浴びた	米澤鐵志	小学館	戦争が始まってからの苦しい生活、満員電車の中で被爆した経験、原爆症にくるしめられたこと。広島を生き抜いた少年の本当のお話。	2013年
17	広島原爆 E	海をわたった折り鶴	石倉欣二	小峰書店	広島で被爆し、白血病で亡くなったサダコさん。サダコさんが折った鶴が海をわたって、ニューヨークのトリビュートセンターに展示されている。サダコさんの折り鶴はなぜ海をわたったのか。	2010年
18	広島原爆 913	原爆の火	岩崎京子	新日本出版社	終戦後、広島のおじの家をたずねたヨシオは、そこにくすぶっている火をおじの形見として故郷へと持ち帰った。福岡県星野村から世界へと広がった原爆の火の話。	2000年
19	広島原爆 916	夏の花たち ヒロシマの献水者 宇根利枝物語	鈴木ゆき江	ひくまの出版	被爆した人たちは、水を求めて死んでいった。せめてその人たちの魂に冷たい水を届けてあげたいという思いから、宇根利枝さんの慰霊碑への献水が始まった。	2004年
20	広島原爆 E	ひろしまのピカ	丸木 俊	小峰書店	親子3人で朝御飯を食べていたときに被爆したみいちゃんは、箸を持ったまま両親と逃げる。被爆体験を心の奥深く沈めていたおばあさんが、語った話をもとに描かれた絵本。	1980年
21	広島原爆 916	はだしのゲン わたしの遺書	中沢啓治	朝日学生 新聞社	「はだしのゲン」を描いた中沢さんが、苦しかった当時のことを思い出して、語り伝える。ときおり、「はだしのゲン」の場面使われており、マンガと合わせて読むと、より理解が深まる。	2012年
22	広島原爆 726	はだしのゲン	中沢啓治	汐文社	中沢さんの被爆体験をもとに描いたマンガ。原爆投下後、戦争の生々しい絵もあるが、ゲンが戦前、戦後をたくましく生き抜いていく姿を読んでほしい。	1975年
23	広島原爆 913	テレビドラマ版 はだしのゲン	中沢啓治	汐文社	ドラマ化された「はだしのゲン」の原作	2007年
24	広島原爆 E	かあさんのうた	大野充子	ポプラ社	原爆が落ちた日の夜、迷子の坊やを抱いて歌っていたのは、おさげの女学生。母さんと呼び続ける坊やをほっておけなかった。	1977年
25	広島原爆 E	伸ちゃんのさんりんしゃ	児玉辰春	童心社	伸ちゃんの宝物は、おじいちゃんくれた三輪車。原爆資料館にある、原爆で黒焦げになった三輪車にまつわる、実話をもとに描かれた絵本。	1992年

26	広島原爆 E	とうろうながし	松谷みよ子	偕成社	ある年の8月6日、とうろう流しが行われた。しかし真夜中に、火の消えたとうろうが沖から潮にのつてもどってきた。	1985年
27	広島原爆 E	ヒロシマに原爆がおとされたとき	大道あや	ポプラ社	広島出身の作者が原爆の恐ろしさを、語り描いた絵本。	2002年
28	広島原爆 E	ひろしまのエノキ	長崎源之助	童心社	原爆で傷ついたエノキは広島を物語る。平和への願いを込めて、子ども達はエノキを守りつづけた。	1988年
29	広島原爆 916	被爆者 60年目の言葉	会田法行	ポプラ社	戦後60年に出版された。被爆され方の願いはひとつ。この世の中から核兵器がなくなること。この本では5人の方が紹介されている。顔や体に大きな傷を、そして心にも傷を負い、生きることがつらいそんな60年を振り返る。谷口さんは、去年の長崎平和祈念式典のとき、被爆者代表で挨拶をした方。	2005年
30	広島原爆 916	続被爆者 70年目の出会い	会田法行	ポプラ社	原爆によって、つらい人生を送ってきた人々。「60年目の言葉」から10年たち、その後を追う。また、福島原発事故後に避難生活を送る人々にもスポットを当てる。	2015年
31	広島原爆 913	アオギリのねがい	「被爆アオギリ二世」の絵本をつくる会	広島平和研究所	被爆したアオギリは、傷ついたからだで、原爆の生き証人として公園を訪れる人に、原爆の恐ろしさを伝えています。このアオギリ二世も大切に育てられています。	2009年
32	広島原爆 913	広島昭和20年8月6日	遊川和彦	汐文社	原爆が落とされることなど誰も知らず、明日の平和を信じ、戦時中でも小さな幸せ、希望を胸に生きていた姉弟たちの、7月16日から、8月6日までの20日間の物語。	2005年
33	広島 319	10代がつくる平和新聞 ひろしま国	中国新聞社編	明石書店	2007年から中国新聞にはさみこまれていた「ひろしま国」は、小学生から高校生の子供たちが、書いた平和に関する記事。子ども達が取材をして、子ども達の目線から真実を知り、平和を考える。	2009年
34	長崎原爆 E	ふりそでの少女	松添 博	汐文社	原爆でなくなった二人の少女。二人の少女はきれいな振袖を着せられて火葬された。なぜ二人は死ななくてはいけなかったか。	1992年
35	長崎原爆 916	永井隆 平和を愛に生きた医師	中井俊巳	童心社	永井隆博士は島根県三刀屋出身。永井博士は長崎の病院に勤めているときに被爆する。白血病になり、余命わずかでも、平和を願いながら原稿を書き続けた。	2012年
36	沖縄 916	白旗の少女	比嘉富子	講談社	沖縄戦。三角の白い旗をもった少女の写真がある。大人になった少女富子さんが、この写真を見つけたのは1977年のこと。富子さんはこの写真を撮ったアメリカ人をさがしだす。そして、少女の頃の辛い体験を、語り、白旗のいきさつを語り始めた。	1989年
37	沖縄 913	あけもどろの空 ちびっこヨキの沖縄戦	高柳杉子	子どもの未来社	6歳のヨキが見た、沖縄での戦争の記憶を、子どもの目線と言葉で描かれている。「あけもどろ」とは、太陽が東の空を染め始める空をあらわす沖縄の言葉。	2010年
38	沖縄 913	つしままる 対馬丸 さようなら沖縄	大城立裕	理論社	1944年、沖縄から本土に向けて疎開(そかい)する船がでた。戦火から逃れるための疎開だったが、対馬丸は攻撃を受け沈没。海をさまよって助かる者もいたが、789人の子ども達が命を落とした。本当にあった話。	1982年
39	東京 913	1945年3月9日 あしたのやくそく	吉村勲二	新日本出版社	明日、人形劇に行こうと約束をした子どもたち。みんなが楽しみにして眠りについたが、その夜の空襲で、その約束は果たされなかった。作者は、これからの子ども達が、明日の約束が守られるように、大きくなってやりたいことがやれるようにという願いを持っている。	2002年

40	東京 913	うしろの正面だあれ	海老名香葉子	金の星社	香代子はたくさんの兄弟に囲まれ幸せに暮らしていたが、太平洋戦争が始まり、一人疎開することになった。疎開中、東京大空襲のため家族が亡くなってしまふ。香代子は悲しみを乗り越えることができるのか。	1991年
41	東京 913	ガラスのうさぎ	高田敏子	金の星社	7歳だった敏子が東京大空襲で、家族を失い、絶望の中、たくましく生きようとする。作者自身の体験を物語にした。	2000年
42	東京 913	猫は生きている	早乙女勝元	理論社	幸せだった家族、猫の親子にも東京大空襲がおそいかかる。逃げまどう人々と猫たちの運命は？作家、画家が、子ども達に伝えたい戦争をえがいた話。	1973年
43	疎開 E	お母ちゃんお母ちゃーんむかえにきて	奥田継夫	小峰書店	戦争中、「お母さん、さようなら。勝つ日までがんばってきます」と、疎開地の島根県へと向かう子ども達。疎開地で待ち受けていたのは、けんかとシラミと空腹とさみしさだった。いつもおかあさんに会える日を夢見ていた。	1985年
44	福岡大空襲 913	火の雨がふる	有原誠治	金の星社	火の雨とは戦争が降らす雨。1945年6月19日、ゆうじの住む博多の町は、真っ赤な炎につつまれた。	1989年
45	空襲 913	麦畑になれなかった屋根たち	藤田のぼる	童心社	戦争中、東京郊外に大きな飛行機会社があり、多い時で5万人もの人が働いていた。空襲をさけるために、東京中から1千人のペンキ屋さんを集めて、広い工場の屋根を麦畑に塗りかえた。しかし苦労は報われず、また攻撃を受ける。	1995年
46	空襲 E	ちいちゃんのかげおくり	あまんきみこ	あかね書房	夏の夜の空襲で、家族と離れひとりぼっちになって町をさまよう、ちいちゃん。悲惨な戦争のために、小さな命が失われていく、静かなお話。	1982年
47	その他 913	一つの花、ヒロシマの歌、	今西祐行	集英社	ゆみ子が最初に覚えた言葉、「1つだけちょうだい」だった。戦争に行くお父さんが「ひとつだけ」と言ってくれたのは、一輪のコスモスだった。	1975年
48	その他 913	約束「無言館」への坂をのぼって	窪島誠一郎	アリス館	戦争で亡くなった画学生的美術館「無言館」にまつわる話。戦場から帰ってこられなかった若者の想いを伝えている。	2010年
49	その他 916	わたしたちの戦争体験 1～10		学研	全10巻の戦争体験記 読みたいテーマから選ぶと良い ①戦場 ②家族 ③学校・遊び ④疎開 ⑤空襲 ⑥沖縄 ⑦原爆 ⑧終戦 ⑨引揚 ⑩成長・発展	2010年
50	その他 210	語りつぎお話絵本 せんそうって なんだったの？ 1～8		学研	全8巻の戦争体験の絵本 ①生活 ②遊び ③家族 ④学校 ⑤戦場 ⑥空襲 ⑦原爆・沖縄 ⑧戦後	2007年
51	その他 916	子どもたちへ、今こそ伝える 戦争 子どもの本の作家たち19人の真実	長新太ほか	講談社	戦争を体験した、児童文学の作家たちが、子ども達に伝えたい戦争体験を語っている。原爆の被害にあった作家もいる。	2015年
52	その他 913	おかあさんの木	大川悦生	ポプラ社	7人の息子たちが兵隊にとられるたびに、おかあさんはキリの木を1本ずつ植えていった。初めはがんばれ！と木に向かって言っていたが、一人二人と死んでいくうちに、無事に帰ってきてほしいとうったえる。(その他の話あり)	1969年
53	その他 913	火垂るの墓	野坂昭如	ポプラ社	昭和20年戦争の中、親も家も失い、二人きりになってしまった兄妹。14歳の清太と、4歳の節子が、懸命に生きようとするせつないお話。(その他の話もあり)	1968年

54	その他 E	おとなになれなかった弟たちに……	米倉 齊加年	偕成社	作者は弟を太平洋戦争で亡くし、戦争の悲惨さ、悲しみ、平和への願いを込めて、この絵本に描いた。戦時中の生活の苦しさも描かれている。	1983年
55	その他 E	はらっぱ戦争・大空襲・戦後～いま	西村 繁男	童心社	「はらっぱ」を通して、ある町の戦後から今、60年間の移り変わりが描かれている。	1997年
56	日中戦争 913	えっちゃんのせんそう	岸川 悦子	文溪堂	中国で元気に暮らすえっちゃん。日本が戦争に負けたことで、つらいことがたくさん起こる。それでもがんばるえっちゃん。でも、たったひとりの、大切な友だちをなくしたとき、えっちゃんは戦争の悲惨さ、つらさを知る。	1999年
57	日中戦争 913	むらさき花だいこん	大門 高子	新日本出版社	中国の大地・南京から持ち帰った花、むらさき花だいこんに込められた、戦争の悲しみと平和への決意とは？	1999年
58	特攻隊 E	すみれ島	今西 祐行	偕成社	何時間後には確実に死ぬとわかっている特攻隊の若者たちと、小学生の子どもたちの交流。美しく悲しいお話。	1991年
59	その他 913	時のむこうに いま、ここにいる	山口 理	偕成社	翔太と理子の兄妹は、戦時中の日本にタイムスリップ。昔に生まれればよかった思っていた翔太だったが、現実とは違っていた。「自分が生きている時代が一番いい時代だ！」と自信を持って生きてほしいという作者の願いが込められている物語。	2014年
60	その他 913	パンプキン 模擬原爆の夏	令丈 ヒロ子	講談社	長崎に投下された原子爆弾とほぼ同じ形状で、核物質を積んでいない爆弾を、パンプキン爆弾という。その爆弾による被害は大きかった。その爆弾の真実にせまろうとする現代の女の子の話。	2011年